かたつむり

句集　かたつむり

布村松景

秋の句

社務所より笛のもれきし雨月かな

楽の狸の遊ぶ 十三夜

雨の日は雨の色せり岩桔梗

笛吹の小指のはねし秋祭

大花火消えてペガサス生まれけり

秋の蝶舞へば色紙のくずし文字

遠花火しばしの間ある二人かな

橋脚を額に見立てて遠花火

赤とんぼ小さな駅の切符切

野佛の知る秋蝶蝶の行方かな

秋彼岸書架に日射しのとどきけり

ひぐらしに追われ林道下りけり

文豪の机とペンと野菊かな

信楽の狸の遊ぶ十三夜

虹立つや峠の茶屋は閉じしまま

煙ごと運ぶ秋刀魚や鄙の宿

木犀の香を忍ばせし頭陀袋

夕蜩竹百幹に響きけり

分教場の柱の木目法師蝉

「かっこう」と鳴く信号の残暑かな

窯出しの大皿ひしゃげ秋暑し

捨てられし破れソファーや秋の雷

稲妻やまだおさまらぬ憤り

山の辺の柿より低き夕日かな

振り向けば塔の水煙鉤の月

笛を吹く二の腕白き秋祭

葡萄種吹いて話の佳境かな

新蕎麦や門前町の古格子

秋晴れの硯職人大胡坐鏡

里神楽山は紫紺に暮れにけり

行く秋や峠の茶屋に昼の月

白菊に少し憂ひを残しけり

白桔梗活けて厠の明り窓

飛鳥路に柿の寄り添ふ野の佛

風の萩母に問ひたきことのあり

髭もじゃの羅漢の笑や鰯雲

夕星や陶工薪を運び終え

赤のまま小さな嘘をつきとほす

忘却も救ひの神か秋扇

駅舎出て聞く国訛り鰯雲

掛け軸の真贋解けぬ夜長かな

秋微雨石屋ひねもす文字を彫る

長き夜やルーペで拾ふ時刻表

爽涼や小犬と走る防波堤

木曽の旅おどけ案山子は雨の中

秋草や漁港見下ろす切通し

管の笛のうねりや星月夜

路地抜けて大きな月と出逢ひけり

月冴ゆる五条の宿の黒瓦

組体操の一気に崩れ秋高し

稲妻や深き眼窩の忿怒像

かなかなのこだまに暮れし鮎の宿

ほととぎす暮色を水に移しけり

マネキンの人待ち顔や秋夕日

体調を気遣ふ便り花芙蓉

爽かや紙工房の朝の水

天高しロダン立ちませ歩きませ

黄落の道行く黒きハイヒール

トロンボーン響く河原や秋の暮

奈良坂に月の虜となりにけり

稜線に雲を残して月孤高

新酒酌む未だ余生とは言い難し

月浩々疑心少しもなかりけり

菩提樹の実に手を伸べて西大寺

円空の銘跡秋を深めけり

ちちろ虫埴輪の口の笑ひをり

ひぐらしや分水嶺の杉木立

掛稲や嘴太き濡れ鴉

烏瓜さげて林道日暮れどき

墓標のみ残す故郷や秋の月

秋深し村に一人の硯彫り

ダンプ去り枯葉の渦を残しけり

木の実落つ投込寺の観世音

托鉢の肩のうすさや柳散る

秋晴れのビル三時の翳りかな

尼寺の山門低くこぼれ萩

行く秋を去来の墓と惜しみけり

推敲の鉛筆措くや窓の柿

筆柿の熟れて羅漢の耳ゆたか

板さんの指踊らせて小鰭鮨

晩秋の雲を散らせる石舞台

一笑にふさわし話そぞろ寒

見すかれし心の底や二日月

月しろや道連れほしき田舎道

追ふほどに又追ふほどに稲雀

過去は過去秋の夕日の影法師

内股に渡る土橋や秋時雨

月しろや道連れほしき田舎道

残る柿鴉銜えて逃げにけり

掛取りの狸の臍や望の月

来し方を振向く風の紅葉かな

移す手に紅葉かつ散る化粧坂

曝涼や褪せし目次の旧漢字

干柿の影 を落とせる古畳

雲水と目が合ひにけり秋小寒

天井の龍の目にあふ秋の雷

冬迫まる一重瞼の将軍傭

掃く人に再び風の落葉かな

鴉一羽遅れて帰る秋の暮

流木の膚ささくれし秋の果

貨車の列遠ざかり行く枯野かな

ポケットは夢の小袋木の実独楽

以下冬の句へ